

朝日新聞 2013年08月27日

松江市教委事務局が「暴力的で過激な描写」と問題視し、閲覧制限を求める理由としたのは「はだしのゲン」10巻に登場する旧日本軍兵士の中国戦線での行為にかかわる描写だった。昨年12月に死去した中沢啓治さんはこの場面をどんな思いで描いたのか。中沢さんのそばにいて、「ゲン」の背景描きを手伝った妻のミサヨさん(70)が朝日新聞に語った。
(聞き手・武田肇)



松江市教委が問題視した「はだしのゲン」の場面。汐文社版の10巻に収められている

検証…「ゲン」なぜ消えた

兵士が中国人男性の首を面白半分（おもしろ半分）に切り落とす。妊婦のおなかを切り裂き、赤ん坊（赤ちゃん）を引っ張り出す——。今から30年近く前、主人がこの場面を描いたとき、私もショックを受け「残酷すぎるのでは」と言いました。主人の答えは「きれいな戦争というのはいないんだ。戦争の残酷な実態を知らせなければ、子どもに戦争というものが伝わらない」。戦争の恐ろしさに小さな頃から触れ、大人になって戦争を防ぐ方法をじっくり考えてほしいというのは、死ぬまで変わらぬ思いでした。

自分が体験した被爆の場面でも、いろんな資料を集めて描いていましたが、体験のない戦場の場面を描くときは、特に多くの資料や文献を読み込んでいました。描けば批判が来ると覚悟していました。「ゲン」はぼくの思いを託しているのだから、へんなことは描けないんだ」と言っていました。

戦場の場面は数コマにとどめて場面転換させ、被害女性の身体は黒く塗り、表情を消して生々しさが出ないようにする。子どもに読ませるにはどこまで表現したらいいかと悩み、工夫を重ねました。



「はだしのゲン」の一コマ。踏まれても強くなる妻は、はだしのゲンのテーマという。汐文社発行のコミック版第3巻から

ゲンの表現が、後半になるほど社会的なものになるというのは事実です。それは自分の分身であるゲンが成長するにつれて、こんなことになったのは誰のせいだと悩むからです。その姿は戦後になっても復興から取り残され、差別され続けた被爆者の怒り、つらさを投影しています。「戦争責任を言わないと、被爆者は泣き寝入りになる」と言っていました。

ゲンは読みたい子には読ませたらいいし、読みたいくない子に無理に読ませなくてもいい。ただ、トカゲのしっぽをちょこっとつかむように、戦争の実態を伝える一部の描写を問題にされ、子どもたちの目につかないところに隠されたのは残念で

なりません。

実は、ゲンの一番のテーマは、踏まれても踏まれてもまっすぐ伸びていく「麦」です。そんな成長物語の背景に戦争と原爆がある。たたかれたり、いじめられたりしても、精いっぱい生きていけばいいことがあるという主人がゲンに託したメッセージは、今の子どもたちの心に響くものがあると信じています。

ゲンの発表の場は、週刊少年ジャンプから、政党・労組系の機関誌へと移りましたが、最後まで少年誌の「はだしのゲン」の延長として描き続けました。政党に入れと何度も勧誘がありましたが、自由にものを考えられなくなると拒絶し、無党派を貫きました。主人らしい生き方だったと思います。